

「なぜ怖がるのか、とイエスは言う」

マタイによる福音書 8:23-27  
イザヤ書 43:2

2025年10月26日  
野村 友美 師

<怖がるということ>

先週から急に寒くなってきました。皆さんは、もう衣替えは済まされましたか？今日は10月も最後の日曜日ですから、これが当たり前の気温なんだろうけど、一週間前にはまだ「蒸し暑いですね」なんて言っていましたよね。

私は水曜日に仙台から帰ってきて、広島空港が仙台と同じぐらい寒いことにびっくりしました。急いで扇風機をしまって、冬の布団とストーブを出したんですが、まだ衣替えが間に合っていない。本当に、こんなに急に気温が変わると、ついていけなくて慌ててしまいます。

急なことや思いがけないことに会おうと、私たちは多かれ少なかれびっくりして、どうしたらいいのか戸惑うでしょう。それが自分たちの安全とか命に関わることだったら、なおさらです。

ある日突然、事故に遭ったり病気になったり、災害が起きたときに、驚きも戸惑いも怖がりもしない人は、ほとんどいないと思います。驚くのも怖がるのも心配するのも、命を守るために必要な感覚だと言ってもいいでしょう。自分の身に危険が迫っているのを、ちゃんと感じ取っているということなんですから。

今日の聖書の物語で、嵐に出会った弟子たちが怖がったのも、当たり前のことでした。なのにイエス様は、助けを求める弟子たちにこうおっしゃっ

たというんです。

「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」

いったいどうしてイエス様は、そんな言い方をなさったのでしょうか。

イエス様の弟子たるものは、どんな危険な目にあっても怖がってはいけない、ということなんのでしょうか。「怖い」と感じるのは、不信仰なことなんのでしょうか。それは少し違ってくると思います。「信仰がないから怖がるんだ」なんてことを、イエス様は言っておられるんじゃないんです。

<嵐に出会った弟子たち>

イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖のほとりの町カファルナウムから向こう岸へ渡ろうとして、舟に乗り込みました。呉港から出ているフェリーや高速船みたいな、立派な船じゃありません。漁師たちが魚を獲るために使うような小さな舟に乗って、イエス様一行は湖に漕ぎ出したようです。そして、その湖の上で、イエス様たちが乗っていた舟は嵐に見舞われました。ガリラヤ湖は小高い山々に囲まれていて、そこから湖に向かって吹き下ろす突風が、こういう嵐を起こすのだそうです。

イエス様の弟子たちの中には、もともとガリラヤ湖の漁師だったペトロとアンデレ、ヤコブ、ヨハネといった人たちが居ました。彼らにとっては、お馴染みの嵐だったかもしれませんが、それでも、慣れているからといって、嵐をどうにかできるわけじゃありませんから、怖いのはやっぱり怖かったでしょう。ガリラ

や湖は166キロ平方メートル、呉市のおよそ半分ぐらいの大きさなんだそうです。湖というよりは、ちょっとした海ぐらいの広さですね。そんな大きな湖で、岸边ならともかく沖の方で嵐に遭ったとしたら、どこにも逃げようがありません。考えるだけでも恐ろしくて、身がすくむ状況です。もしかしたら、この時の風と波は、慣れているはずのペトロたちでも命の危機を感じるぐらい、強烈だったのかもしれない。激しい嵐で、舟は波にのまれそうになった、と福音書はその様子を伝えています。

どこにも逃げられない湖の上で、激しい風に煽られて、逆巻く波に揺さぶられて、まさに緊急事態の真ただ中だというのに、この時イエス様は眠っておられました。舟に乗り込むまで、イエス様は大勢の人に囲まれて、病気を癒したり悪霊を追い出したり、話をしていましたから、疲れ切っておられたのかもしれない。それにしあって、今にも舟が沈みそうな嵐の中でぐっすり眠っているのは、もう肝が据わっているというようなレベルではないと思います。

きっと弟子たちも、イエス様が眠っておられることに不安を感じたんでしょうね。このまま寝かせておいたら、イエス様も自分たちも溺れてしまうんじゃないか。イエス様は神様の力で助かるかもしれないけど、私たちまで一緒に助けてもらえるかどうかはわからない。そういう不安と恐怖が、この弟子たちの言葉から伝わってきます。

「主よ、助けてください。おぼれそうです。」

一方、起こされたイエス様は、自分たちを襲っている嵐じゃなくて、弟子たちの様子に目を向けて言われました。

「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」

そしておもむろに起き上がると、風と湖をお叱りになりました。すると風も波もぴたりと止んで、すっかり凪になったんです。

この出来事を見て、弟子たちは驚いてお互いに呟きました。このお方はいったいどういうお方なんだ、風や湖さえも従うなんて。

神様の権威で悪霊を追い出して、どんな病人も癒すイエス様の力を、弟子たちはすぐそばで見て、聞いて、体験して、よくよく知っていたはずでした。その彼らがこんなにも驚いたのには、理由があります。風や波を支配するということは、イスラエルの人たちにとって特別な意味があったんです。その一つが、民族のアイデンティティを形作っている出エジプトの物語です。神様に導かれ、モーセに率いられてエジプトを脱出しようとしたイスラエルの民は、その途中で海辺に追い詰められてしまいました。目の前には海が、そして背後にはエジプトの軍隊が迫ってきたとき、神様がモーセを通して働かれました。

神様に命じられて、モーセが手を海に差し伸べると、強い東風が海の水を押し戻して、人々の目の前に乾いた地面の道が現れたんです。人々はその道を通って、無事にエジプトから逃げ延びることができました。

そしてもう一つ、激しい風と波で思い起こされるのは、預言者ヨナの物語でしょう。

「ニネベの町に行って悔い改めを呼びかけなさい」という神様の命令に背いて、ヨナは逆方向へ行く船に乗って逃げようとしてしました。ですがヨナが乗った船は嵐に遭って、暴風と

大波に揺さぶられて沈みそうになります。船乗りが恐怖に駆られて祈り、叫び、積荷を海に投げ捨てていた一方で、ヨナは船底でぐっすり寝込んでいました。そこで船長が「寝ているとは何事か。起きてあなたの神に助けを求めろ」とヨナを起こします。このくだりは、今回のイエス様と弟子たちの様子によく似ていますね。

ヨナの物語では、誰が嵐の原因かを神様に確かめるくじ引きがヨナに当たって、ヨナが海に投げ込まれると嵐が静まりました。ここからヨナが魚に呑み込まれて話は進んでいくのですが、イエス様と弟子たちの物語はヨナとは違う展開を見せます。

神様が、ではなくてイエス様ご自身が、嵐を静めてしまわれたんです。出エジプトの物語も、預言者ヨナの物語も、風や水といった自然を従わせる力があるのは、ただ神様だけだ、ということを伝えています。人間の力も自然の力も、この世界のどんな力も、創り主である神様の力には敵わない。

神様は圧倒的な力でこの世界に働きかけて、ご自分の民を危険から救い出して、ご計画を実現される。それがイスラエルの民の誇りであり、歴史の中で受け継いできた信仰でした。

自然をも従わせる力、神様だけが持っておられるはずの力を、イエス様が持っている。この事実に驚かされて、弟子たちは呆然として呟いたんです。

「このお方はいったいどういう方なのだ」と。

＜なぜ怖がるのか、とイエスは言う＞

弟子たちはみんな、イエス様のことを神様から遣わされた救い主だと信じて、イエス様について来ていたはずでした。イエス様の話をすぐそばで聞いて、イエス様がたくさんの人たちを癒して

助けておられるのを、いつも目にしてきました。

でも考えてみれば、弟子たち自身がイエス様に助けられるのは、この嵐の出来事が初めてだったんです。

イエス様の力を、他人事としては知っていました。その力でいつか自分たちのことも救い出してくださると、信じていました。それでもいざ逃げ場のない湖の上で、嵐に揺さぶられたら、イエス様が一緒にいても弟子たちは安心できなかったんです。さすがにこの状況は、イエス様でもどうにもできないかもしれない。イエス様はこの嵐から、私を助けようとは思ってくださらないかもしれない。そんな不安と恐ろしさに駆られて、彼らはイエス様を起こさずにいられませんでした。

でもイエス様は、そんな弟子たちのことを「信仰がない」とはおっしゃいません。「信仰だ、信仰がない」じゃなくて、「信仰の薄い者たちよ」とイエス様は弟子たちに呼びかけておられます。そう、怖がって不安になってしまったからといって、信仰がないわけじゃないんです。

神様がイエス様をお遣わしになったことも、人々を癒すイエス様の愛と憐れみも、弟子たちは知っていましたし、信じていました。

問題は、イエス様の力と愛の果てしなさを信じきれていなかったことです。人間の力も自然の力も、この世界のどんな力も従わせる、神様の力の果てしなさを知っているのに。

どんな危険からでもご自分の民を救い出される、神様の愛の果てしなさを知っているのに。その神様が、イエス様を救い主として遣わし

たと信じているはずなのに。

「なぜ怖がるのか」とイエス様は、弟子たちにおっしゃいました。なぜ怖がったのか、ではありません。命を脅かすような嵐に出会ったら、怖がるのは当たり前です。逃げ場がないところで追い詰められたら、怖いに決まっています。それでも、この世界のどんな力にも勝つことができる神様の、力と愛の果てしなさを知っているなら。その神様が、イエス様を通して働かれると信じているなら。

「わたしと一緒にいるのに、どうして怖がったままにいるのか」と、イエス様は弟子たちに言うておられるんです。

怖がったっていい、でも、わたしと一緒にいるのに怖がったままにいるな。そうイエス様は、弟子たちに呼びかけておられるんです。今こうして教会に集まって、イエス様を礼拝している私たちも、人生の嵐の中で「信仰の薄い者」になっている時があるかもしれません。イエス様が一緒にいてくださることは知っている。でもこの状況は、イエス様でもどうにもできないんじゃないか。イエス様はこの嵐から、私を助けてはくださらないかもしれない。そんな嵐に不安で怖くてたまらなくなる時も、イエス様は私たち一人一人に呼びかけておられます。

「なぜ怖がるのか」、わたしが一緒だから怖がったままでないくていい、と。強い風が吹きつけて、大きな波にのまれそうになる時が、誰の人生にもあるでしょう。耐え難いほどの苦しみや悲しみに、時には怒りに揺さぶられて、「主よ、助けてください。溺れそうです」と叫ぶしかない日がきつとあると思います。

それでも、一緒にいてくださるイエス様が必ず、どんな嵐の真ただ中からでも私たちを救い出し

てくださる。この信仰を杖にして、恐れを希望に変えて、人生の旅路を歩き抜くようにと、私たちはイエス様から励まされているんです。

思いがけない出来事に揺さぶられて、不安で怖くて叫び出したくなる時も、イエス様が私たちと同じ舟に乗っていてくださいます。この世界のどんな力にも勝つことができる神様が、イエス様を通して働いてくださいます。

まさにこの教会の2階の集会室に、神様が預言者イザヤを通して言われた約束の言葉が掲げられているのを、思い出してください。

「水の中を通るときも、  
わたしはあなたと共にいる。  
大河の中を通っても、あなたは  
押し流されない。  
火の中を歩いても、焼かれず、  
火はあなたに燃えつかない。」  
(イザヤ43:2)

そう言うてくださる神様の独り子、私たちの救い主、イエス・キリストの力と愛の果てしなさを、どんな時にも私たちの希望の光とできますように。

お祈りいたしましょう。